

2012年6月4日(月)14時-17時

シンポジウム「日本におけるギャップイヤーの可能性」

【主催】 明治大学国際教育研究所、ブリティッシュ・カウンシル

【共催】 株式会社エスティーエートラベル、明治大学国際連携本部

【協力】 日本ギャップイヤー推進機構協会(JGAP)、公益財団法人日本英語検定協会

プログラム:

14:00 - 14:05	開会挨拶 明治大学 副学長 勝 悦子
14:05 - 14:15	「英国におけるギャップイヤーの概要」 ブリティッシュ・カウンシル プロジェクトマネージャー(教育推進・連携) エマ・パーカー
14:15 - 14:40	「"ギャップ" - Great Adventure people - 英国における若者や学生が国内外においてどのように過ごすのか？」 STA Travel (UK) 北欧州及びアフリカ地区ビジネスディベロップメントディレクター イアン・スウェイン
14:40 - 15:05	「ギャップイヤー:英国の経験が日本に示唆すること」 九州大学 教育国際化推進室 特任准教授 廣瀬 武志
15:05 - 15:25	「なぜ今ギャップイヤーか - 日本型ギャップイヤーの将来展望 -」 明治大学 国際連携機構 特任教授 芦沢 真五
15:25 - 15:35	休憩
15:35 - 16:00	「東京大学におけるギャップイヤーの検討状況」 東京大学 副理事 鈴木 敏之
16:00 - 16:15	ギャップイヤー経験者による体験談 明治大学 4年生 青木 優
16:15 - 16:55	パネルディスカッション モデレーター:エマ・パーカー パネリスト:イアン・スウェイン、廣瀬 武志、芦沢 真五、青木 優 一般社団法人日本経済団体連合会 社会広報本部 主幹(教育担当) 長谷川 知子 ※フロアとの質疑応答も行います。
16:55 - 17:00	閉会挨拶 ブリティッシュ・カウンシル 駐日副代表 アリソン・ビール

要旨:

シンポジウムの冒頭、明治大学副学長勝悦子氏より開会の挨拶が行われました。そのなかでは、日本の高等教育において、タフネス、オープンネスを備えたグローバル人材養成の責務に対する認識が高まり、インターンシップや短期留学と並び、ギャップイヤーという手段に注目が集まる中、本シンポジウムが、日本の大学の教育力の強化や国際戦略を検討するにあたり意義深いものになるようにとの期待が述べられました。

続いてブリティッシュ・カウンシルよりエマ・パーカー(プロジェクト・マネージャー)が登壇し、英国でのギャップイヤーに関する特徴の紹介が行われました。ギャップイヤーを支援する、政府、非営利団体、民間組織による様々なオンラインツールが紹介された後、とくに、英国のギャップイヤーは、日本において想定されているものとは異なり、いわゆる「制度」として存在するのではなく、あくまで希望者が自由に選択する「オプション」であり、ギャップイヤー期間中は大学には所属せず、個人の責任においてギャップイヤーを過ごすことにより、自立心の芽生えが期待される、等について指摘が為されました。

STA Travel (UK)北欧州及びアフリカ地区ビジネスディベロップメントディレクターのイアン・スウェイン氏からは、英国のギャップイヤーの現状について、参加する若者の規模や、行き先と過ごし方をどのように選ぶか、また政府、非営利団体、民間企業による情報提供のあり方、さらに最も多く選ばれる行き先や内容、大学や雇用側のギャップイヤーに対する評価について、具体的な情報が提供されました。とりわけ、現在は年間 23 万人程度の若者がギャップイヤーに参加しており、その規模は今後も増大することが予測されること、また、ギャップイヤーの準備段階ではソーシャル・メディアやウェブサイト等のツールが重視されるが、STA が実際に提供しているように、対面によるきめ細かいサポートの需要が高い点などにも言及されました。

次に九州大学教育国際化推進室特任准教授の廣瀬武司氏は、「ギャップイヤー: イギリスからのレッスン」と題する講演の中で、ギャップイヤーをめぐる日英の制度的・文化的背景のちがいをふまえた上で、英国におけるギャップイヤーから日本が学べる点、及び日本での導入にあたっての課題を指摘しました。とりわけ、ギャップイヤーの過ごし方のモデルや、質保証とボランティアプログラムの提供などを含めた政府の関与のあり方、ギャップイヤーの体験がもたらすスキル等において、日本は英国の事例から多くを学べる一方で、ギャップイヤー期間中のプログラムづくりでは、産学官民での連携が不可欠であることや、経済的支援のあり方、雇用慣行の見直しなど、日本において検討すべき課題も少なくない点が論じられました。

明治大学国際連携機構特任教授、芦沢真五氏は、「なぜ今ギャップイヤーか? - 日本型ギャップイヤーの将来展望 -」と題し、日本においてギャップイヤーへの関心が高まった背景について、グローバル人材育成の要請を中心に概観したあと、明治大学としての具体的な取り組みを紹介しました。日本型ギャップイヤーの目指すところとして、学生の学びを豊かにする点、さらに海外体験を通じてコミュニケーション能力をはじめとするグローバル人材に必要なスキルを身に付けるための機会の提供等の点が挙げられる中で、とくに明治大学としては、ギャップイヤーを経験する学生一人ひとりの学びを長期的に迎えるための E ポートフォリオの活用を産学連携の上で進めようとしているとの興味深い事例が紹介されました。

続いて東京大学副理事の鈴木敏之氏が登壇し、東京大学におけるギャップイヤーの検討状況について紹介しました。同大学の濱田純一総長の私的諮問機関として設置された「入学時期の在り方に関する懇談会」において指摘された課題意識をふまえ、新たな教育システムとして秋季入学、および「ギャップターム」の導入が構想された背景について説明された後、同大学において想定されている秋季入学導入による学生の進路パターン、ギャップターム導入の趣旨等への言及がありました。とくに、ギャップターム活動を学生にとって有意義な体験の機会とするための学内体制の整備、大学間連携、学社連携の必要性が指摘され、学社連携による体験活動推進構想の取り組みが紹介されました。さらに、秋季入学・ギャップターム導入をめぐる課題が指摘された上で、産業界・政府への要望、及び学内外の反応について触れられ、最後には、ギャップタームの活用の試行とその検証も視野に入れ、夏季休業期間を利用した在学生向けの多様なプログラムの整備を含め、同大学として当面進める予定の対応について紹介されました。

さらに明治大学国際日本学部4年の青木優氏が、大学を休学してギャップイヤーを取り、世界一周旅行に出掛けて得た経験について講演しました。青木氏は、「多くの町に行ってみたい」「将来世界で仕事をしていきたい」「世界における日本の文化のあり方を知りたい」という3つの目標を持って世界一周旅行を企画しましたが、世界各国での人々との出会いを通して、「経済力と幸せはリンクしていない」「幸せってなんだろう」「かれらと僕が違う理由はなんだろう」といった、根源的な価値観の転換を体験し、「人生は日本だけではない」「原体験こそ価値がある」といった見方を得られたことなど、大変興味深い体験談を聞くことができました。

以上の講演の後、日本経済団体連合会社会広報本部主幹(教育担当)の長谷川知子氏が加わり、登壇者全員が会場から集まった質問にまとめて回答する形式でパネルディスカッションが行われました。まず冒頭で、長谷川氏から、日本におけるギャップイヤーの可能性に対する産業界の期待についてお話がありました。グローバル人材が求められている経済・社会背景の概観の後、産業界がグローバル人材に求める素質・スキルや、大学に期待する取組みについて紹介され、さらに、産業界ではギャップイヤーに対して、主体性や職業意識、異文化理解の涵養などの効果が期待されている点などが指摘されました。

会場からは、大別すると①英国のギャップイヤーの詳細、②日本でギャップタームを導入する際の課題に関する質問が提示されました。①では、英国でギャップイヤーに参加する者の市場としての規模の大きさ、コストと資金源、各国のビザの扱い、民間企業、非営利団体、政府がそれぞれどのような役割を果たしているのか、といった点について議論されました。②では、学生は内向きか、という問題から始まり、休学期間中の在籍費の軽減など、現状ではギャップタームを取るためのバリアとなっているシステムをいかに改善するか、さらに「秋入学」が導入されないと「ギャップターム」は実現しないのかといった両概念の関連性についての質問に対して、パネリストがそれぞれの見解を示しました。

さらに、ギャップタームの導入によって就職時期は変化するのか、卒業後のギャップタームについて、大学や企業がどのような支援を検討しているのか、について議論されました。この問題について、産業界としては、秋入学に対する各大学の対応が定まってから具体的な対策が検討されることになる点をふまえた上で、すでに経団連に所属する企業の3割が通年採用を実施するなど、グローバル人材の採用をめぐる企業の柔軟性は高まっている点などが指摘されました。

最後にブリティッシュ・カウンシル駐日副代表のアリソン・ビールより閉会の挨拶が行われ、まずは日英両国におけるギャップイヤーの現状と課題について取り上げた本シンポジウムのスピーカー各位への謝辞が述べられました。また、英国におけるギャップイヤーは、まさに人生の「空白期間」を埋める作業をとおして、各自が正規のカリキュラムや職業からは得られないような様々なスキルを身につける機会であるからこそ、社会から支持されている点に触れられ、今後もギャップイヤーをめぐる日英の意見交換が継続して行われることを期待する旨が述べられて閉会となりました。